

平成24年度 市内遺跡発掘調査報告書

2013

甲賀市教育委員会

序

滋賀県の南東部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂玉斎王頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」をはじめとした歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、約 530 箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数です。また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置しており、新名神高速道路が市内を横断して両地域をつないでいます。このような立地によって今後、市のさらなる発展も期待されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれている性格上、目にする機会が少ないものです。しかし、地中に埋もれているからこそ、郷土の歴史を知るもっとも身近な歴史資料であり、先人が残した貴重な文化資産です。このような埋蔵文化財を様々な開発から保護し、さらに記録に留めることも教育行政の大きな責務です。

教育委員会では市内の様々な開発に伴い、埋蔵文化財の試掘調査・確認調査を実施しており、調査の中で地域の歴史を語る上で非常に重要な知見を得ることができました。その調査成果をまとめた本報告書が甲賀市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、調査に参加していただいた方々、報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々・機関に心より感謝申し上げます。

平成 25 年（2013 年）3 月

甲賀市教育委員会
教育長 山本 佳洋

例 言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成23年度に実施した試掘調査および平成24年度に実施した試掘調査に伴う整理調査の概要と、平成23年度に実施した史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第40次）発掘調査の概要をまとめたものである。

2. 本書で報告している試掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）および滋賀県文化財保存事業費補助金（県費補助金）を得た。また、史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第40次）発掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）を得た。

3. 平成23年度および平成24年度の甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

調査主体 甲賀市教育委員会 教育長 山本佳洋

調査事務局 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課

課 長 林口幸治（平成23年度）

縮谷 隆（平成24年度）

課長補佐 長峰 透

埋蔵文化財係 係長 鈴木良章（調査担当者）

主査 小谷徳彦（調査担当者）

技師 渡部圭一郎（調査担当者）（平成24年度主査）

4. 本文の執筆は小谷（第1章）と鈴木（第2章）が行い、編集は小谷が行った。

5. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準としている。また、史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第40次）発掘調査で使用した座標は、日本測地系に準拠する。なお、本書で示す北は座標北である。

6. 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SB：竪穴住居・掘立柱建物 SD：溝状遺構 SK：土壇・土坑

7. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。

目 次

第1章	平成23年度試掘調査	
	甲賀市の概要と調査概要	1
	北黄瀬遺跡の調査（11-01次・11-14次）	4
	11-02次 竹石遺跡の調査	9
	宮町遺跡第41次調査	15
	水口城遺跡の調査（11-06次・11-10次）	19
	11-08次 古屋敷館遺跡の調査	24
	11-09次 貴生川遺跡の調査	27
	11-11次 下川原遺跡の調査	34
	11-15次 下浦遺跡の調査	38
第2章	史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第40次）発掘調査	42

第1章 試掘調査の概要

甲賀市の概要と調査概要

甲賀市は滋賀県の南端に位置し、東西約43.8km、南北約26.8km、面積は481.69km²で滋賀県全体の約12%を占め、県内第3位の面積である。琵琶湖に面していない内陸部に位置するが、大阪と名古屋からそれぞれ100km圏内にあり、近畿圏と東海圏を結ぶ役割を果たしている。

市内には総数530ヶ所あまりの遺跡があり、紫香楽宮跡、甲賀郡中惣遺跡群、垂水頓宮跡の国指定史跡をはじめとして歴史的に非常に重要な遺跡が数多く存在する。

平成23年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査は、開発事業などにかかる試掘・確認調査が16件、国史跡紫香楽宮跡宮町地区(以下、宮町地区)の遺構内容確認調査が1件であった。なお、平成23年度中には記録保存のための本発掘調査は実施しなかった。

開発事業などに伴う試掘・確認調査のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で実施した調査が9件、同隣接地で実施した調査が1件、同範囲外で実施した調査が6件であった。隣接地で実施した調査では遺跡の存在を確認したため、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を拡大した。また、範囲外の調査は「甲賀市みんなのまち守り育てる条例」の規程にもとづき、開発事業の実施に先立ち、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施したものである。なお、試掘・確認調査の件数は、平成22年度の25件より9件減少した。



図1 甲賀市の位置

表1 平成23年度実施試掘調査一覧表

調査 年度	調査 開始日	調査 終了日	調査地 町名	調査範囲 対象施設	目的 説明	遺跡 名称	結果					
							調査面積 遺物	詳細	遺構	詳細	遺構高深尺	
11-01	H23.4.13	H23.4.13	信楽町	黄瀬	1,507.74	黄瀬遺跡	9.00	×	×			
11-02	H23.5.13	H23.5.19	水口町	三大寺	3,183.15	駐車場	135.00	○	須恵郡・土師器・陶器	○	堀穴住居・竪立柱組ほか	35~100cm
MM04	H23.7.12	H23.7.14	信楽町	宮町	754.79	個人住宅	20.00	○	土師器・陶器・磁器	×		
11-03	H23.6.8	H23.6.8	甲南町	寺庄	958.68	集合住宅	48.00	○	瓦	×		
11-04	H23.6.20	H23.6.21	甲南町	寺庄	1,015.22	集合住宅	21.50	×		×		
11-05	H23.9.5	H23.9.8	水口町	貴生川	3,917.97	多目的複合施設	70.00	×		×		
11-06	H23.9.13	H23.9.13	水口町	中郷	63.46	分譲住宅	15.00	○	須恵郡・陶器	○	小土坑	60cm
11-07	H23.10.11	H23.10.12	水口町	本町	737.09	集合住宅	15.00	○	陶器・瓦	×		
11-08	H23.11.15	H23.11.16	甲南町	市原	6.20	母受管理施設	7.50	×		×		
11-09	H23.12.5	H23.12.12	水口町	貴生川	4,753.00	土地区画整理	205.00	○	土師器・瓦器・須恵器	○	柱穴、溝、土坑	40~50cm
11-10	H23.12.1	H23.12.1	水口町	城内	168.00	個人住宅	9.00	○	陶器・瓦	○	溝1条	100cm
11-11	H24.2.3	H24.2.7	水口町	泉	70.60	個人住宅	15.00	×		○	田水田畦帯	155cm
11-12	H24.2.27	H24.3.2	信楽町	神山	16,188.37	工場建設	225.00	×		×		
11-13	H24.3.13	H24.3.13	水口町	名取	2,225.90	駐車場造成	90.00	×		×		
11-14	H24.3.22	H24.3.27	信楽町	黄瀬	229.69	狭帯建設	11.00	○	陶器	×		
11-15	H24.3.15	H24.3.16	甲南町	野田	2,739.61	集合住宅	90.00	×		×		
MM06	H23.9.26	H24.1.31	信楽町	宮町		遺構確認調査	500.00	○	須恵郡・土師器・陶器	○	竪立柱建物、溝、土坑、ヒツツガ	35~40cm

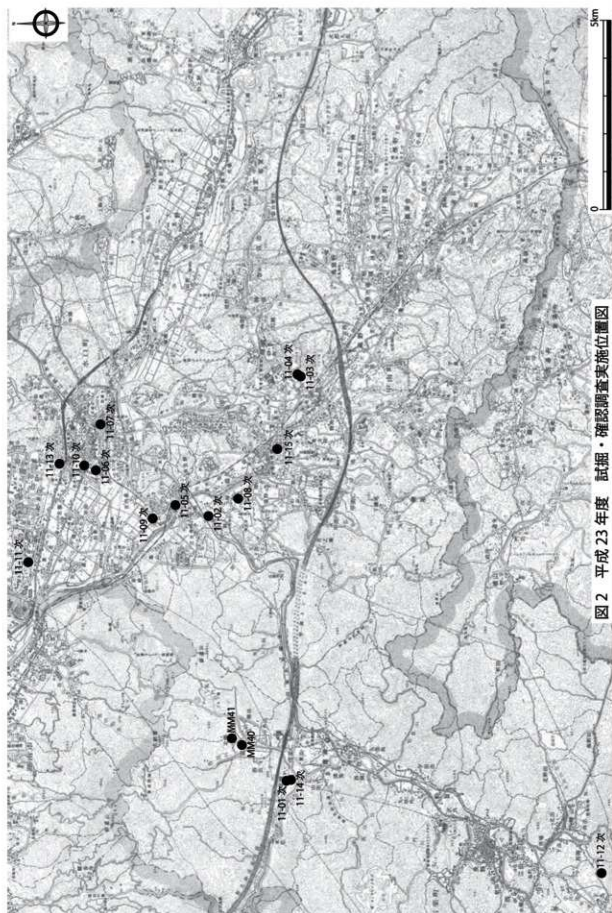


図2 平成23年度 試掘・確認調査実施位置図

表 1 に平成 23 年度中に実施した調査の結果を一覧表にして示したが、遺物の出土を確認した調査が 7 件、遺構の存在を確認した調査が 5 件あった。本報告書では平成 23 年度に実施した試掘・確認調査のうち、埋蔵文化財包蔵地内で行った調査について概要を記す。また、宮町地区の遺構内容確認調査については次章で調査概要を記すこととする。

なお、平成 23 年度に実施した試掘調査で記録保存の本発掘調査の対象となるものはなかった。

北黄瀬遺跡の調査

遺跡の概要と過去の調査

北黄瀬遺跡は、信楽盆地の北西隅に位置する遺跡で、大戸川と馬門川の両河川および盆地北側の山地に挟まれた平地に広がっている。周辺には宮町遺跡や鍛冶屋敷遺跡、新宮神社遺跡などの多くの遺跡が分布している。これらの遺跡では奈良時代中頃の遺構や遺物が多く確認され、調査の結果、聖武天皇が造営した紫香楽宮に関連する遺跡群であることが判明している。

これまで北黄瀬遺跡では平成13年度と平成14年度には場整備事業に伴う大規模な発掘調査を実施している。

平成13年度の第1次調査は、黄瀬北側集落の東端に隣接する箇所を対象とした調査であった。調査では室町時代中期から戦国時代を中心とする掘立柱建物や塀、区画溝などのほか、近世の埋桶遺構を検出した。また、遺構は検出されなかったが、奈良時代後半から平安時代初頭の遺物が出土し、北黄瀬遺跡が古代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。

平成14年度の第2次調査は、遺跡の中央北寄りの箇所で行われた。調査では内法約1.8mの規模をも



図3 北黄瀬遺跡試掘調査トレンチ位置図 1:2,500

つ方形横板組みの大型の井戸が発見された。この井戸は奈良時代中頃に作られたとみられ、井戸枠は手斧で加工して槍鉋で仕上げたヒノキの柵目材を上下2段に連結し、榫組した上で釘止めしていた。さらに、井戸には掘立柱建物の覆屋が伴っていた。同様の構造や規模をもつ井戸は、平城宮の造酒司や大膳職、内裏などでわずかに確認されているだけである。このことから考えて、北黄瀬遺跡で見つかった大型の井戸は、紫香楽宮跡に関連する役所で使用した井戸であると推定されている。なお、この井戸が見つかった箇所を含む 2,888 m² が平成 22 年 8 月 5 日に国史跡紫香楽宮跡に追加指定された。

平成 23 年度は、北黄瀬遺跡の範囲内において、2 件の試掘調査（11-01 次・11-14 次）を実施した。以下、それらの調査概要について記す。

試掘調査 11-01 次

調査経緯

黄瀬変電所内で機器設置に伴う基礎工事が計画されたため、工事の実施に先立ち、遺構の有無を確認する調査を実施することとなった。調査地は、平成 14 年度に実施した第 2 次調査第 1 トレンチの西側隣接地にあたる。このトレンチは第 2 次調査の東半部に位置し、中世の溝が検出されているが、遺構の密度は低い。湧水が激しかったと報告されていることが一因であろう。第 2 次調査の東半部の状況を再確認することも含めて、今回の調査は重要であると考えられた。

調査地が変電所内であったため、変電機器との安全距離を確保しながらの作業となり、非常に限られた範囲での調査となった。そのため、調査面積は 9 m² と狭かった。なお、調査は平成 23 年 4 月 13 日に実施した。

調査概要

〈基本層序〉

調査地の基本層序は、上から①碎石層、②黄褐色砂（造成土）、③暗灰色粘土（旧水田耕作土）、④褐色砂混じり暗灰色粘質土（旧水田床土）、⑤暗褐色粘質土（自然木などの有機物を含む）、⑥淡灰色粗砂（地山）であった。現況の地表面から⑤層までが 70 cm、⑥層までが 90 cm であった。

自然木などの有機物を含む⑤層があり、その下層の⑥層上面でかなりの湧水があったことから、自然流路もしくは谷状地形の堆積土にあたると考えられる。この状況は第 2 次調査の東半部の状況と一致する。

〈検出遺構・出土遺物〉

今回の試掘調査では遺構および遺物を確認することができなかった。

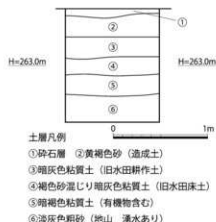


図 4 11-01 次 土層断面図 1:40



写真1 調査区全景



写真2 土層断面

試掘調査 11-14 次

調査経緯

鉄塔の建て替え工事に伴う試掘調査として実施した。対象地の周辺では第2次調査で奈良時代中頃の大型の方形井戸が見つかり、紫香楽宮跡に関連する役所が存在していた可能性が推定されている。調査は平成23年3月22日から27日にかけて行った。

建て替え工事の対象となる鉄塔は2箇所あり、一方は第2次調査第2トレンチから南に約60mの位置（11-14次第1トレンチ）で、もう一方は第2次調査第1トレンチに接する位置（11-14次第2トレンチ）である。調査面積は、第1トレンチが9㎡、第2トレンチが5㎡と狭小であったが、周辺の調査状況から紫香楽宮跡に関係する遺構の存在が期待された。

調査概要

〈基本層序〉

基本層序は、第1トレンチが上から①水田耕作土、②水田床土、③黄褐色粘質土、④暗褐色粘質土、⑤茶灰色粘質土であった。現況の地表面から40cm下で③層、60cm下で④層、90cm下で⑤層を確認した。また、第2トレンチが上から①畑耕作土、②床土、③暗灰色粘質土、④黄褐色粗砂、⑤淡青灰色粘質土、⑥暗灰色粘土、⑦青灰色粘土であった。現況の地表面から80cm下で④層、90cm下で⑤層、115cm下で⑥層、145cm下で⑦層を確認した。第2トレンチの④～⑦層は谷地形堆積層と考えられる。

〈検出遺構〉

第1トレンチ、第2トレンチともに遺構を確認することができなかった。

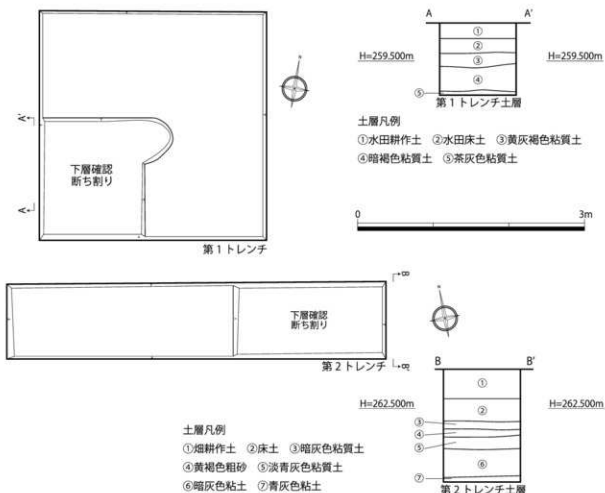


図5 11-14次 平面図・土層図 1:50

〈出土遺物〉

第1トレンチで信楽焼の破片が少量出土したが、すべて水田床土である②層からの出土であり、ほ場整備施工時の流れ込みであると判断できる。

まとめ

11-01次調査・11-14次調査ともに周辺の調査状況から紫香楽宮跡に関連する遺構の存在が期待されたが、奈良時代の遺構や遺物を確認することはできなかった。また、11-14次調査第1トレンチで信楽焼が出土したが、ほ場整備によって流れ込んだものであり、遺跡の性格や年代を示す資料ではなかった。

11-01次調査や11-14次調査第2トレンチの状況から黄瀬変電所の周辺部には自然流路または谷地形が存在しており、第2次調査第1トレンチも含めて湧水が激しい要因になっていると考えられる。

11-01次調査や11-14次調査では残念ながら紫香楽宮跡に関連する遺構を確認することはでき

なかった。しかし、調査地周辺部に自然流路または谷地形の存在が想定できたことは、北黄瀬遺跡の全体像を考える上で重要な知見を得られた。さらなる遺跡の内容の解明は今後の調査に期待したい。

〈参考文献〉

信楽町教育委員会 2004 「紫香楽宮跡関連遺跡 北黄瀬遺跡発掘調査概要報告」信楽町文化財報告書第12集
鈴木良章 2007 「第三節 紫香楽宮の遺跡」『甲賀市史』第1巻古代の甲賀 甲賀市史編さん委員会編



写真3 1トレ全景



写真4 1トレ土層



写真5 2トレ全景



写真6 2トレ土層

11-02 次 竹石遺跡の調査

調査位置と調査経緯

竹石遺跡は、柚川が甲賀丘陵と甲南丘陵の間から水口盆地へ流れ出る付近に位置し、柚川左岸の中位段丘上に立地している。遺跡から北を望むと水口盆地を見渡すことができ、西側には飯道山がそびえている。その山麓部分には横穴式石室をもつ古墳が数多く築造され、「甲賀群集墳」(甲賀市史編さん委員会 2007、甲賀市教委 2008)と呼ばれている。

調査地は、平成 22 年度に実施した第 1 次調査の南側隣接地にあたり、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、第 1 次調査の状況から遺跡は既定の範囲外へ広がることが想定されていた。

調査地で駐車場の造成工事が計画されたことから、遺構の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。調査は、4 箇所の調査区を設定し、調査面積の合計が 135 m²、調査期間が平成 23 年 5 月 13 日から 19 日で実施した。

調査概要

《第 1 トレンチ》

竪穴住居 2 棟 (SB0102・SB0103) のほか、掘立柱の柱穴 2 基 (SP0101・SP0104)、土坑 2 基を確認した。また、調査区の南端から約 5m 付近で、遺構面の高さに約 25 cm の高低差がみられた。この高低差は、ほ場整備以前の水田の高低差を反映していると考えられる。以下、検出した主要な遺構について記載する。

竪穴住居 SB0102 調査区の中央部で検出した竪穴住居。東半分は調査区外となる。規模は 5m×4m 以上、床面積 20 m² 以上である。部分的に確認した深さは、遺構検出面から約 15 cm であった。竪穴住居の埋土からは土師器が出土した。

竪穴住居 SB0103 調査区の南端で検出した竪穴住居。規模は 4.0m×4.5m、床面積 18 m² である。確認した遺構の深さは、遺構検出面から約 30 cm であった。埋土からは土師器が出土した。

柱穴 SP0101 調査区の中央部付近で検出した柱穴。掘形の平面プランは隅丸方形である。残存する深さは、遺構検出面から 40 cm であった。

柱穴 SP0104 調査区の北端部で検出した柱穴。掘形の平面プランは不整形な隅丸方形で、中央に円形の柱痕跡が確認できる。残存する柱穴の深さは、遺構検出面から 15 cm であった。柱穴 SP0101 と比較すると、残存する柱穴の深さは浅いが、柱穴の底面は SP0101 と SP0104 ではほぼ同じ高さであるため、後世の削平を受けて柱穴の深さが浅くなってしまったものと考えられる。

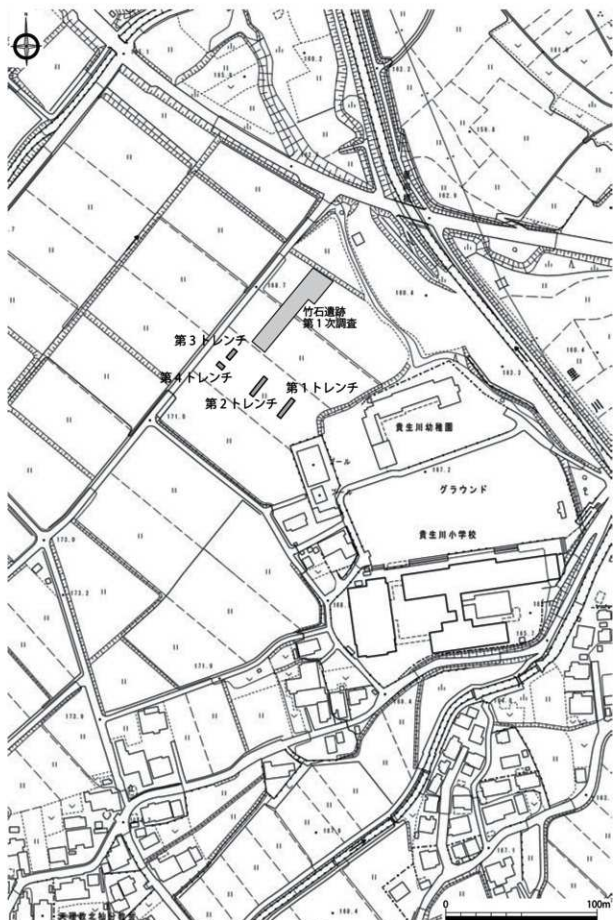


図6 試掘調査11-02次 調査トレンチ位置図 1:2,500

《第2トレンチ》

竪穴住居1棟、掘立柱の柱穴を検出した。掘立柱の柱穴のうち2基については、一本柱塀になるとみられる。また、調査区の南端で遺構面の高さに約25cm高低差がある。この高低差は、第1トレンチと同様に、ほ場整備以前の水田の高低差を反映していると考えられる。

以下、検出した主要な遺構について記載する。

竪穴住居 SB0201 調査区の南端で検出した竪穴住居。検出したのは竪穴住居の南東角部で、調査区の北側へさらに延びるため、全体の規模は確定できない。調査区内で確認した規模は一辺3m以上である。部分的に遺構を掘り下げたところ、遺構の深さは遺構検出面から約25cmであった。竪穴住居の埋土からは土師器が出土した。

掘立柱塀 SA0205 調査区の中央付近で検出した一本柱の掘立柱塀。調査区外の東側と西側にさら

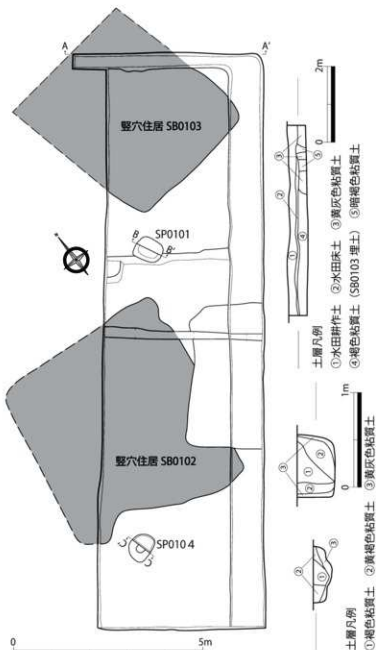


図7 11-02次 第1トレンチ平面図・断面図



写真7 第1トレンチ全景



写真8 竪穴住居 SB0103

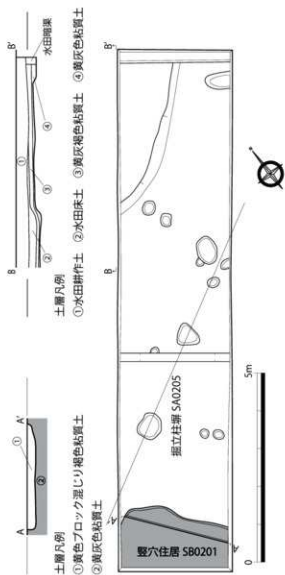


図8 第2トレンチ平面図・断面図

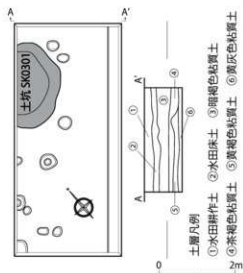


図9 第3トレンチ平面図・断面図



写真9 掘立柱罫 SA0205

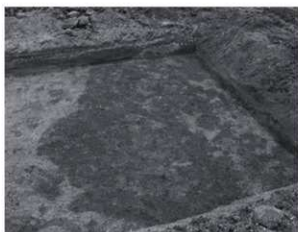


写真10 竪穴住居 SB0201



写真11 第3トレンチ全景

に延びる。調査区内で確認したのは柱穴 2 箇所であり、少なくとも 3 間以上の掘立柱罫であったと考えられる。柱間は約 2.7m で 9 尺となる。柱穴の平面プランは隅丸方形で、柱を抜き取っ

た痕跡がみられる。柱穴の埋土からは時期を特定できる遺物が出土しなかった。

《第3トレンチ》

土坑1基と掘立柱の柱穴を検出した。遺構検出面の深さは、現況の水田上面から90～100cmであった。第1トレンチ・第2トレンチと比べると、遺構検出面の深さが深くなっている。これは、ほ場整備以前の水田が南から北に向って低くなっており、第1トレンチと第2トレンチにおいても同様の状況が窺えることから、第1・第2トレンチから第3トレンチに向って遺構検出面が傾斜しているためと推測できる。

土坑SK0301 調査区の北西隅で検出した土坑。調査区内で確認したのは約半分で西側に広がる。平面プランは不整形な円形で直径約225cmを測る。深さは遺構検出面から約15cmであった。時期が特定できる遺物が出土しなかった。

その他の柱穴 第3トレンチでは柱穴を10箇所を確認した。その大半は直径20～30cmの円形のもので、深さは20～30cm程度であった。柱穴の埋土から出土した遺物はごく少量であるが、土師皿が含まれており、中世の掘立柱の柱穴であると考えられる。

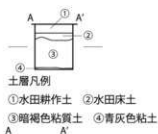
《第4トレンチ》

第1～第3トレンチと異なり、遺構を確認することはできなかった。

水田上面から約110cm下で青灰色粘土層が露出した。これは湿地状の水性堆積層と考えられる。また、この層から遺物は出土しなかった。おそらく第4トレンチの周辺には、ほ場整備施工以前に小規模なため池のようなものが存在していたと推測される。



写真12 第4トレンチ掘削状況



土層凡例

①水田耕作土 ②水田床土

③暗褐色粘質土 ④青灰色粘土

A A'

A A'

1m

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

図10 第4トレンチ
平面図・断面図



写真13 第4トレンチ土層

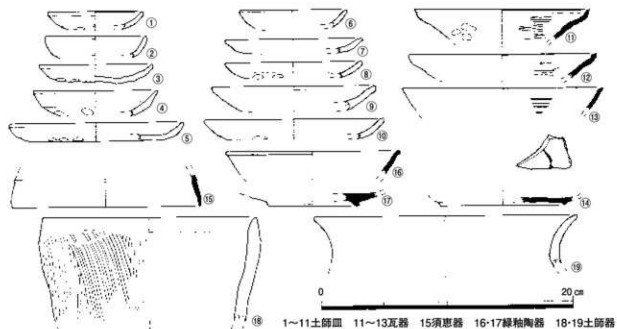


図 11 11-02 次出土土器

まとめ

以上のように、第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチにおいて竪穴住居や掘立柱塼などの遺構を確認することができた。また、出土した遺物の状況から竪穴住居は古墳時代後期のものと考えられる。

平成22年度に北側の隣接地で実施した第1次調査において竪穴住居や掘立柱建物、土壌墓などを確認している。これらの遺構の存在から周辺に古墳時代と中世の集落が存在していたと推定した。今回の調査地はそのすぐ南側に隣接し、今回の調査で確認した遺構が古墳時代後期の竪穴住居と中世の掘立柱の柱穴であることから、第1次調査で確認した遺構と一連のものである可能性が非常に高い。したがって、今回の調査地も「竹石遺跡」の一部であると言える。

今回の調査成果を受けて、竹石遺跡の範囲を拡大した。今後、さらなる調査が必要だが、遺構はさらに広い範囲に広がる可能性が高いと考えられる。集落の全容を捉えるためにも今後の周辺の調査に期待したい。

なお、今回の調査で確認した遺構については、保護層を確保して地下に保存する対策を取って、造成工事を施工した。

〈参考文献〉

- 甲賀市教育委員会 2011 『下川原遺跡第11次・竹石遺跡第1次発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第17集
 甲賀市教育委員会 2012 『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成22年度試掘調査』甲賀市文化財調査報告書第19集

宮町遺跡第41次調査

調査位置と調査経緯

調査位置は、宮町遺跡の北東部、宮町北側集落に所在し、紫香楽宮跡の宮殿の中心区画から北東約300mに位置する。南側に隣接する水田では第7次調査が行われ、掘立柱建物や掘立柱塀が確認されている。ここで見つかった一本柱塀 SA0708 の延長線が今回の調査区内を通過する。そのため、調査区内で SA0708 の延長が確認される可能性を考慮して調査を行った。また、周辺で多くの掘立柱建物や掘立柱塀などが検出されており、中心区画の東方に位置する官衙の可能性が推定されている。今回の調査においては、これらの遺構の一部が確認できる可能性も考えられた。

今回の調査は個人住宅の建て替えに伴う試掘調査として実施した。なお、工事計画が土壌改良を行わないものであったため、地耐力を考慮して基礎工事の掘削深度までの深さで調査を実施した。ただし、一部、岩盤の石が地表面近くまで露出している箇所があり、その周辺部については工事での掘削の可能性を考え、断ち割り調査を実施した。

調査は、調査面積 20 m²、平成 23 年 7 月 12 日から 14 日にかけて行った。

調査概要

〈基本層序〉

調査地の基本層序は、上から①黄灰色砂（表土）、②茶褐色粘質土（盛土）、③暗灰色粘質土、④灰褐色粘質土、⑤花崗岩系岩盤（地山）であった。現況の地表面から 40～50 cm で④層、50～70 cm で⑤層に達した。④・⑤層は断ち割り調査を行った箇所でのみ確認したが、北から南に向って傾斜している状況が認められた。

〈検出遺構〉

今回の調査では遺構を確認することができなかった。

〈出土遺物〉

今回の調査では土師器、陶器、磁器などが出土した。ただし、出土した遺物はすべて小破片であり、2次堆積層と考えられる③層から出土したものであった。

まとめ

今回の調査地は紫香楽宮跡の中心を構成する遺構群に隣接することから、紫香楽宮跡に関連する遺構を確認できることが期待された。しかし、調査の結果、紫香楽宮跡に関連する遺構を検出することはできなかった。また、一部、奈良時代と考えられる土師器が出土したが、すべて2次堆積層からの出土であった。

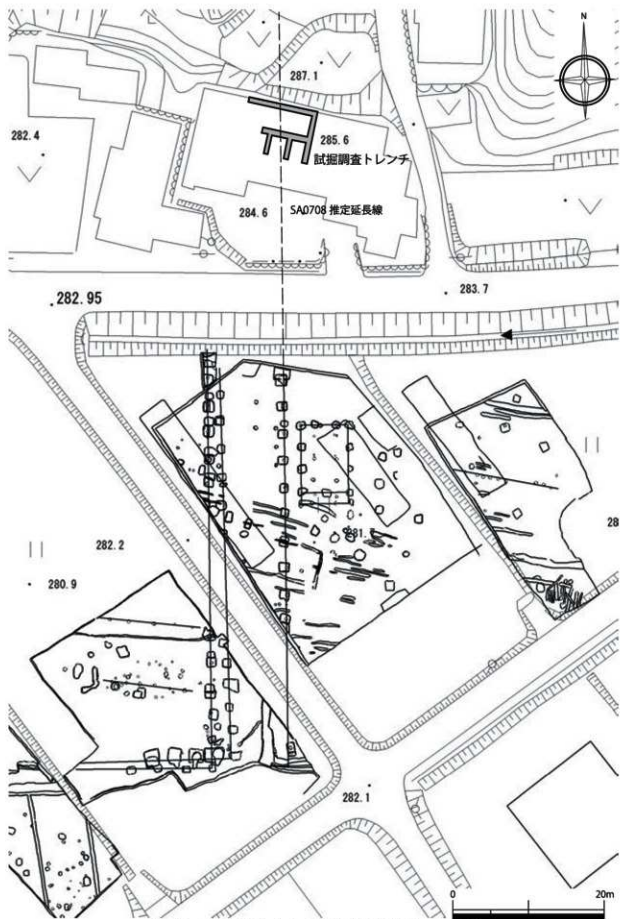


図 13 試掘調査トレンチ位置と周辺遺構 1 : 500

ただし、工事計画の関係で調査の掘削深度が限られていたため、奈良時代の整地層と考えられる④層の上面まで掘削したわけではない。遺構が確認できなかったのはそのための可能性がある。

一部の断ち割り調査で確認した結果、④層の上面から工事による掘削底面までは約30cmの厚さあり、遺構の保護層が確保されていた。調査によって不要な掘削をすることで、地耐力が保てず、地盤改良などの必要が生じ、本来保存される遺構を損傷する結果となってしまふことを避

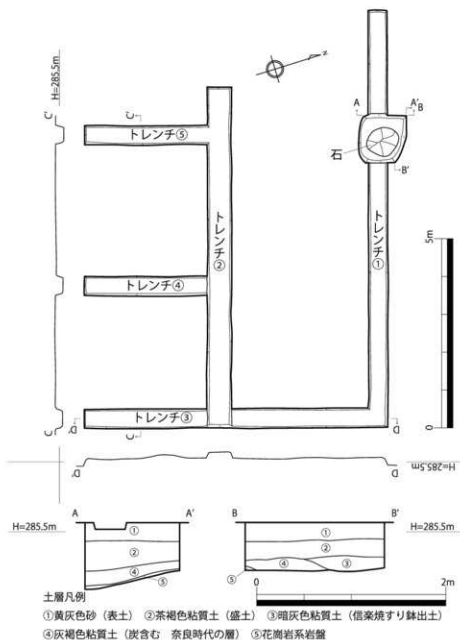


図 14 平面図・断面図

けるため、工事の掘削深度までの調査とした。紫香楽宮跡に関連する遺構の確認については、今後の調査に委ねることとしたい。

《参考文献》

- 甲賀市教育委員会 2008 「紫香楽宮跡関連遺跡発掘調査概報」
- 甲賀市教育委員会 2011 「史跡紫香楽宮跡保存管理計画書」

水口城遺跡の調査

遺跡の概要と過去の調査

水口城は、古絵図によると、本丸の北側に二之丸があり、本丸の東・西・北にわたって家臣団屋敷が形成されていた。これらを含めて城地とし、その範囲は「郭内」と呼ばれていたようである。水口城遺跡は、この範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲としている。

これまで水口城遺跡で実施した発掘調査は、小規模な試掘調査が中心である。平成 17 年度に 2 件、平成 18 年度と平成 19 年度に 1 件ずつ、平成 22 年度に 2 件の調査を実施している。これらの調査のうち、平成 17 年度に行った二之丸推定地北東部の調査（H17-1 次）と本丸の堀の北側と東側隣接地の調査（H17-9）、平成 22 年度に行った本丸西側の家臣団屋敷推定地での調査（10-25 次）で遺構を確認しているが、それ以外の調査では遺構を確認できていない。遺跡範囲の大半が宅地化されて住宅が密集しているため、遺構の残存状況があまり良くない可能性がある。

平成 23 年度は水口城遺跡の範囲内において、2 件の試掘調査（11-06 次・11-10 次）を実施した。以下、それらの調査概要について記す。

試掘調査 11-06 次

調査経緯

分譲住宅の建設に伴う試掘調査として実施した。調査地は、本丸西側の住宅地内に位置し、古絵図によると家臣団屋敷地となっている。当該地の南側隣接地を 10-25 次で調査し、土坑を 1 基確認している。調査は、面積 15 m²で平成 23 年 9 月 13 日に実施した。

調査概要

〈基本層序〉

基本層序は、上から①礫混じり褐色砂質土（表土）、②礫混じり黄褐色粘質土（旧建物解体後整地土）、③礫混じり褐色粘質土（旧建物建設時攪乱層）、④黄褐色粘質土（地山）であった。現況の地表面から④層まで深さ 80 cm であった。

〈検出遺構・出土遺物〉

調査区の北西端で直径約 1m の円形の土坑を検出した。検出したのは土坑の約半分で残り半分は調査区外となる。深さは約 15 cm。

土坑内から須恵器と信楽焼の播り鉢が出土したが、ごく新しい遺物も混在するため、現代の攪乱によるものと判断できる。

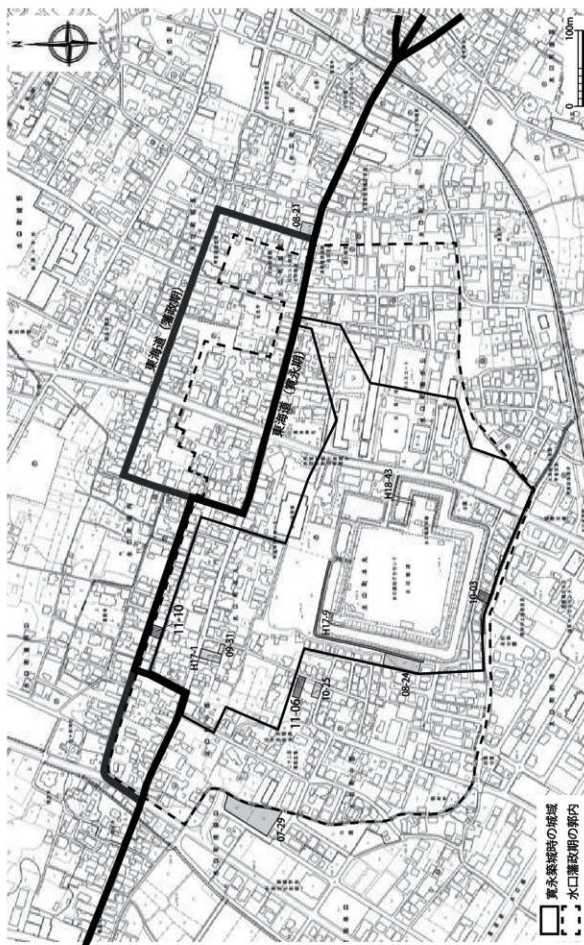


図 15 水口城の推定範囲と調査位置 1 : 5,000

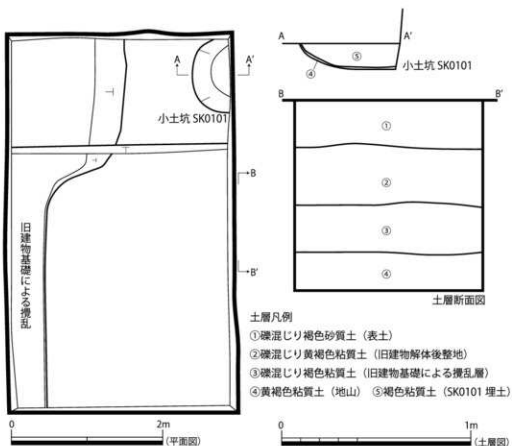


図 16 試掘調査 11-06 次 平面図・断面図



写真 14 調査区全景



写真 15 小土坑 SK0101

試掘調査 11-10 次

調査経緯

個人住宅の建設に伴う試掘調査として実施した。調査地は旧東海道の隣接し、水口城の城域を避けるために旧東海道が北側へ迂回する場所にあたる。調査は、面積 9 m²で平成 23 年 12 月 1 日に実施した。

調査概要

《基本層序》

調査地の基本層序は、上から①碎石層、②暗褐色粘質土、③黄褐色粘質土、④灰褐色粘質土、⑤黒褐色粘質土（旧畑耕作土）、⑥黄灰色粘質土であった。②～④層は盛土である。現況の地表面から⑥層までの深さは100cmであった。

調査開始直後に③層から瓦の出土があり、遺構面の可能性を考慮したが、現代の遺物を含んでいたため、さらに掘り下げた結果、⑥層が遺構面であることが判明した。

《検出遺構》

⑥層の上面で幅40cmほどの素掘溝を検出した。溝の深さは約20cm。溝から遺物は出土しなかった。

《出土遺物》

②および③層から信楽焼や瓦が出土したが、出土した層位は現代の宅地造成に伴う盛土であり、

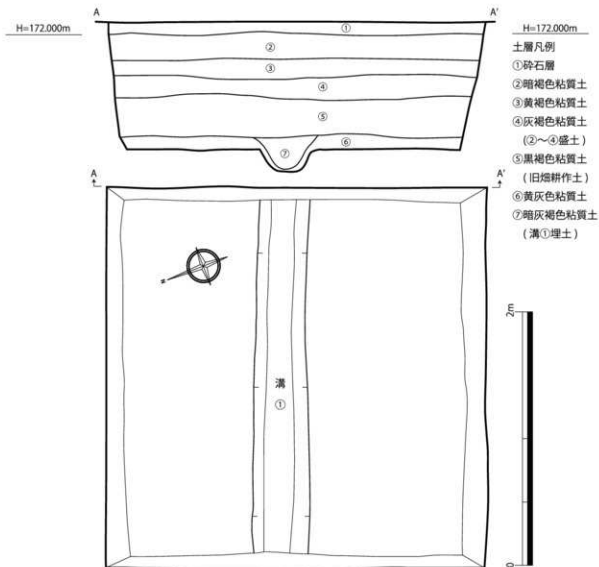


図 17 11-10 次 平面図・断面図 1 : 30

2次堆積である。また、⑤層から青磁や土師器が出土した。⑤層は宅地化される以前の畑の耕作土である。そのため、今回の調査で出土した遺物から、調査地の遺構の年代や性格を判断するのは難しいと言わざるを得ない。

まとめ

11-06次では小土坑を確認したが、現代の攪乱に伴うものであると考えられる。南側隣接地で行った10-25次でも土坑を確認しているが、遺構の残存状況が良くなく、遺構の年代や性格を把握する資料は得られていない。11-06次の調査地も同様の状況であったと言える。ただし、④層が遺構面となることは間違いなく、同じ状況は10-25次でも確認している。今後も周辺の調査状況を注意深く見ていく必要がある。

一方、11-10次は溝1条を確認したが、溝から遺物は出土せず、時期を特定することはできなかった。調査地が旧東海道に接する位置にあり、検出した溝の方位と道路の方位が同じような向きであることから、旧東海道の道路側溝の一部である可能性が考えられる。しかし、検出面が現況の地表面から100cmと深く、周辺の現況地形と旧東海道の関係が明らかになっていないため、断言はできない。11-10次の調査地周辺ではこれまでに発掘調査が実施されておらず、既存の調査データの蓄積がない。今後、周辺の調査事例が増加するのを待って、今回の調査で検出した遺構の性格は判断したい。

〈参考文献〉

- 高田 徹 2010 「水口城跡」『甲賀市史』第7巻 甲賀の城 甲賀市史編さん委員会編 甲賀市発行
甲賀市教育委員会 2012 「甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成22年度試掘調査」甲賀市文化財調査報告書第19集



写真 16 調査区全景

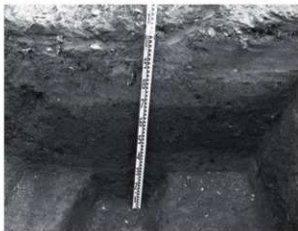


写真 17 土層断面

11-08 次 古屋敷館遺跡の調査

調査位置と調査経緯

古屋敷館遺跡は、甲南町市原集落の北方に位置する。水口町袖中に隣接し、遺跡のすぐ西側を袖川の支流である滝川が流れている。『甲賀市史』第7巻によると、現在は遺構の半分近くが破壊されているが、少なくとも二つ以上の曲輪が存在していたと考えられている。現在、遺跡は竹藪となっているが、竹藪内に土塁や堀を確認することができる。調査対象地は遺跡の南西隅にあたり、『甲賀市史』第7巻に収録されている縄張り図では曲輪Ⅱの西側に存在する土塁の位置に相当する。

調査地では滝川の河川改修に伴い、市道の付け替え工事が計画された。そのため、遺構の有無を確認する試掘調査を実施することとなった。今回の調査対象は市道の付け替えに伴う暗渠管理設部分である。調査は、面積7.5㎡で平成23年11月15日から16日にかけて実施した。

調査概要

〈基本層序〉

基本層序は、上から①青灰褐色粘質土（盛土）、②褐色粘質土（旧表土）、③黄褐色粘質土、④淡黄灰色シルト（地山）、⑤淡灰色粗砂（地山）であった。③層は、しまり弱く、木の根を多く含む状況で樹木による攪乱をかなり受けていた。現況の地表面から40～50cmで③層、100cmで④層、110cmで⑤層に達した。

〈検出遺構・出土遺物〉

今回の調査では遺構・遺物を確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査では土塁の一部が確認できることを期待されたが、調査の結果、遺構や遺物を確認することはできなかった。現況の地表面から約30cmの厚さで後世の盛土である①層が存在しており、後世の削平により土塁が失われた可能性も考えられる。しかし、今回の調査範囲は非常に狭小であり、かつ、古屋敷館遺跡での初めての発掘調査である。そのため、今回の調査結果で当該土塁のすべてが失われたと判断するのは拙速である。今後の周辺の調査状況を精査して見極める必要がある。

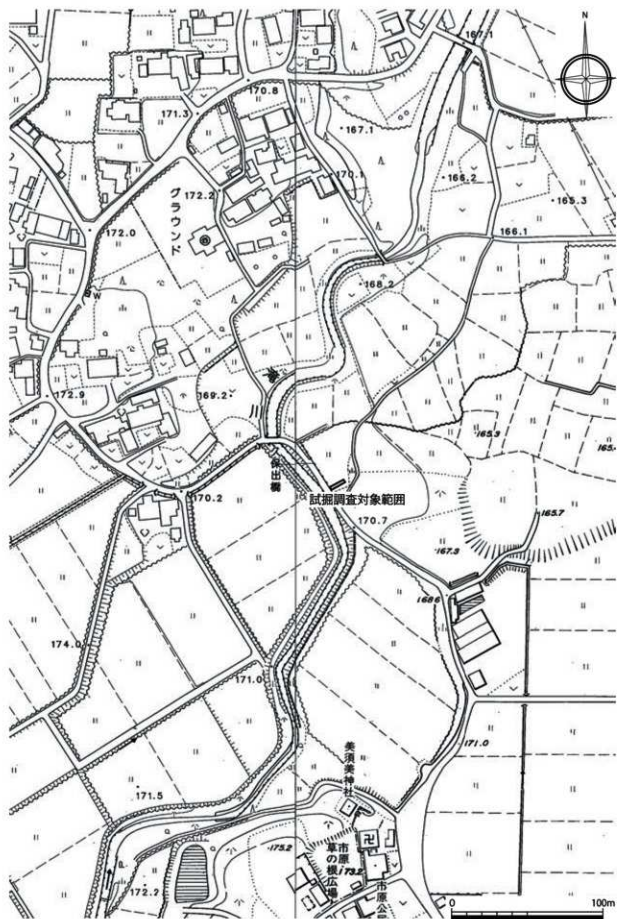


図 18 試掘調査 11-08 次 調査対象地位置図 1 : 2,500

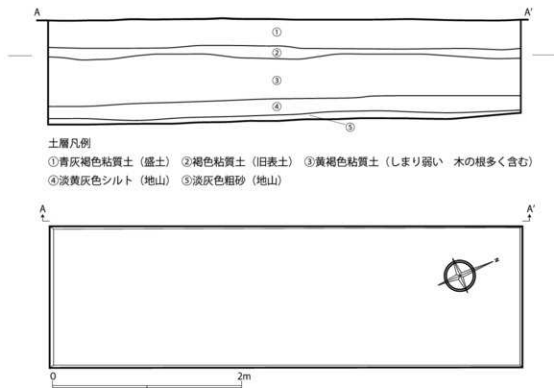


図19 平面図・断面図 1:40

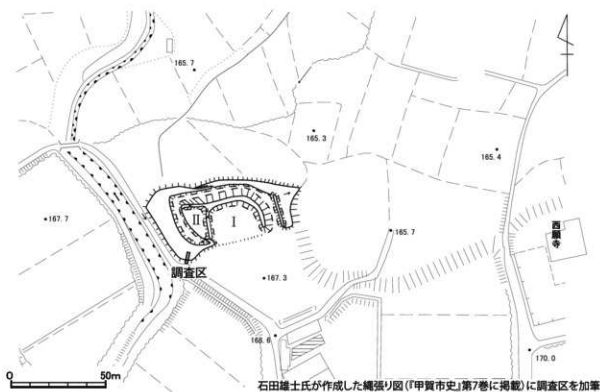


図20 試掘調査トレンチと縄張り図

〈参考文献〉

石田雄士 2010 「古屋敷館跡」『甲賀市史』第7巻 甲賀の城 甲賀市史編さん委員会編 甲賀市発行

11-09 次 貴生川遺跡の調査

調査位置と調査経緯

貴生川遺跡は柚川右岸に位置し、柚川が形成する河岸段丘上に立地する。遺跡の立地する面と遺跡の南側では2mほどの高低差があり、河岸段丘の先端に位置していることがわかる。

平成 20 年度に実施した区画整理の計画に伴う試掘調査（08-27 次）で発見された遺跡である。また、南側の隣接地では平成 21 年度に試掘調査（09-04 次）を実施し、遺跡が南側へ広がらないことを確認している。

今回の調査地は 08-27 次で調査対象とした範囲に含まれているが、08-27 次では調査区を設定していない箇所である。08-27 次では計画地全体に対して遺跡の有無を確認することを目的としたため、計画地全体の状況が把握できるように調査区を設定した。

今回は、区画整理事業を進めるにあたって記録保存のための発掘調査を行う必要がある範囲を確定し、遺構密度などのデータを正確に得ることを目的として 08-27 次で未調査の箇所に調査区を設定して調査を実施した。

調査は、トレンチ 4 箇所で合計面積が 205 m²、平成 23 年 12 月 5 日から 12 日にかけて実施した。

調査概要

第 1 トレンチ

〈基本層序〉

基本層序は、上から①耕作土、②床土、③黄色斑混暗灰褐色粘質土、④茶褐色粘質土、⑤灰色粗砂であった。現況の地形が南東から北東に向って傾斜しており、調査区内においても中央部から北



写真 18 第 1 トレンチ全景



写真 19 第 1 トレンチ土層

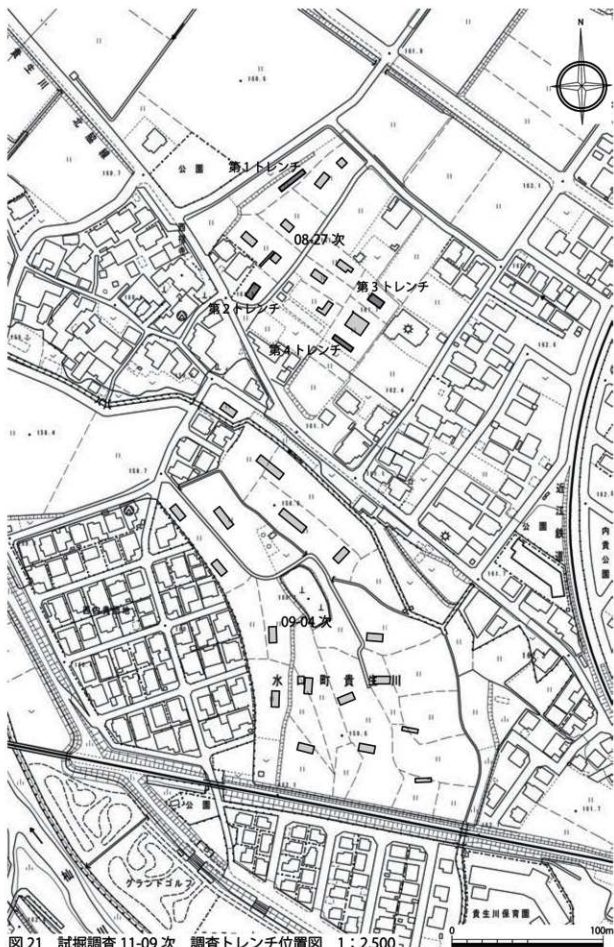


図 21 試掘調査 11-09 次 調査トレンチ位置図 1 : 2,500

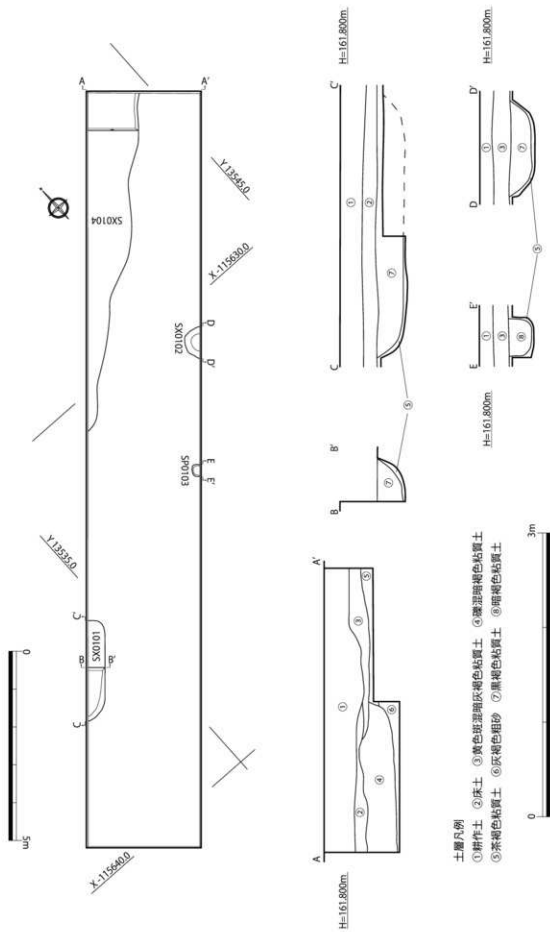


図 22 第 1 トレンチ平面図・土層図

西側に大きく落ち込んでいた。

〈検出遺構〉

第1トレンチでは地形の落ち込み(SX0104)と黒木土由来のピットや土坑を確認したのみである。

〈出土遺物〉

第1トレンチでは土師器や瓦器が出土したが、小破片ばかりで摩滅が著しいものばかりであった。

第2トレンチ

〈基本層序〉

基本層序は、上から①耕作土、②床土、③黄灰色粘質土(遺構ベース面)であった。現況の地表面から40～50cm下で③層に達した。遺構はすべて③層上面で検出した。

〈検出遺構・出土遺物〉

第2トレンチでは素掘溝や複数のピットを検出した。

調査区の西端で検出した素掘溝SD0201は、調査区外へ広がっているため、溝幅は不明である。

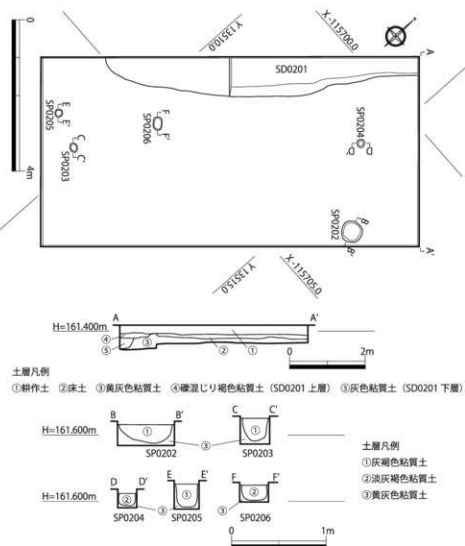


図23 第2トレンチ平面図・断面図



写真20 第2トレンチ全景



写真21 第3トレンチ全景

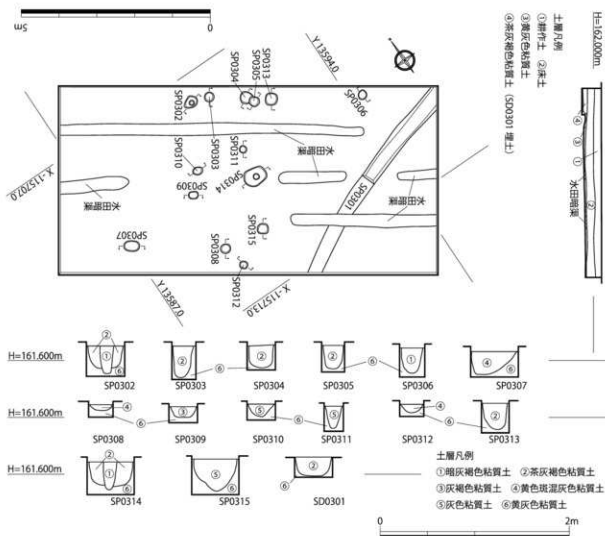


図 24 第 3 トレンチ平面図・断面図

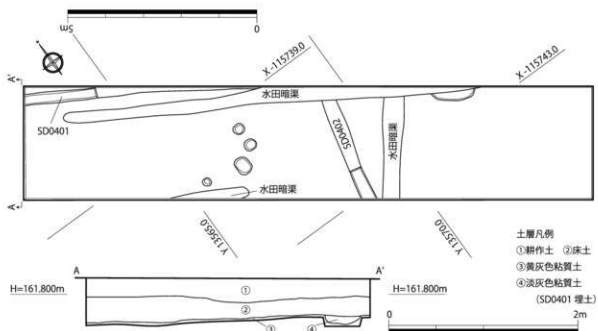


図 25 第 4 トレンチ平面図・断面図

深さは20～30cm程度。溝からは土師器や瓦器が出土した。

ピットは、直径20～30cmほどの円形のもので、深さが20～30cm程度であった。ただし、SP0202のみ直径50cmほどあった。ピットからは土師器や瓦器が出土した。

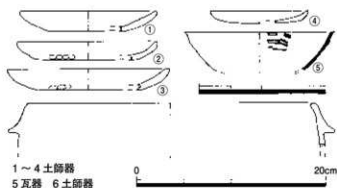


図26 11-09次出土土器

第3トレンチ

〈基本層序〉

基本層序は、第2トレンチと同じ。遺構面の深さも同様であった。

〈検出遺構・出土遺物〉

第3トレンチでは多くのピットを検出した。大半のピットは直径30～40cmの円形のものであったが、不整形な隅丸方形の掘形のものもあった。ピットの深さは30cm前後が多かったが、残りの良くないピットは深さ10cm以下であった。また、一部に40cmほどの深さのものもあった。ピットからは土師器や瓦器が出土したが、小破片ばかりであった。

第4トレンチ

〈基本層序〉

基本層序は、上から①耕作土、②床土、③黄灰色粘質土であった。③層は第2トレンチや第3トレンチの③層に類似する。現況の地表面より50～60cm下で③層に達するが、北東から南西方向に向って傾斜していた。

〈検出遺構〉

水田暗渠とみられる溝のほかには土坑状の遺構やピットとみられる遺構をいくつか検出したが、遺構の深さはすべて5cm以下と非常に浅く、残りが良くない。

〈出土遺物〉

第4トレンチからは須恵器、土師器、瓦器などが出土したが、すべて②層からの出土であり、2次堆積によるものであった。

まとめ

調査の結果、第2トレンチと第3トレンチを中心に溝やピットなどの遺構を数多く確認した。出土した遺物に瓦器が一定量含まれていることから中世の集落が存在していたと考えられる。08-27次でも瓦器が大量に出土しており、中世の集落の存在が推定されていた。今回の調査状況でも追認できる。

ただし、第1トレンチでは西側に向かって自然地形の落ち込みを確認し、集落の西端である可能性がある。また、第4トレンチの調査状況からは、南側の遺構の残存状況が非常に良くないことが推測できる。

今回の調査結果および08-27次の調査成果によって、区画整理の計画地において遺跡の保護対象範囲を確定し、記録保存のための発掘調査の対象範囲が明確となった。今後、区画整理事業の実施にあたっては事前に記録保存の発掘調査を行うこととなる。今後、発掘調査によって中世の集落の姿が明らかになることを期待したい。

《参考文献》

- 甲賀市教育委員会 2010 「甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成20年度調査分」甲賀市文化財報告書第16集
甲賀市教育委員会 2011 「甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成21年度試掘調査 宮町遺跡第38次・39次調査」
甲賀市文化財調査報告書第18集
甲賀市教育委員会 2012 「甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成22年度試掘調査」甲賀市文化財調査報告書第19集

11-11 次 下川原遺跡の調査

調査位置と調査経緯

下川原遺跡は甲賀市水口町泉に所在し、水口盆地の北西部に位置する。柚川と合流した野洲川が遺跡の南側に迫るが、野洲川が形成した河岸段丘上に立地するため、周囲は安定した地勢である。遺跡の北側是水口丘陵に隣接し、丘陵上には滋賀県指定史跡の東籬子塚古墳と西籬子塚古墳がある。また、遺跡の西側では信楽山地と水口丘陵が最も近づき、この付近に東海道の横田の渡しがあった。まさに水口盆地への西側の玄関口である。現在は遺跡のすぐ南側を国道1号が東西に通っている。

遺跡は東西約1km、南北200～250mの範囲に広がっている。そのほぼ中央部に北側の水口丘陵から舌状に延びる尾根があり、遺跡を東西に二分する。

発掘調査は、これまでに試掘調査を含めて第11次調査まで実施されている。遺跡の西半部で行われた第2次調査では、竪穴住居50棟、掘立柱建物11棟が見つかった。竪穴住居からは多くの須恵器や土師器などが出土し、7世紀前半から中葉を盛期とする集落跡であることがわかった。

遺跡の東半部での発掘調査は、遺跡の縁辺部で、かつ、小規模なものばかりである。南端部で実施した第8次調査と第11次調査では集落の南限と推定される溝が検出され、須恵器や土師器、緑釉陶器、瓦器などが出土した。

遺跡東半部の北端部と東端部で実施した第10次調査では竪穴住居や掘立柱建物が確認されている。

今回の調査地は、第10次調査第1トレンチの東側に近接した場所にあたる。調査対象地で個人住宅の建設が計画されたため、遺構の有無を確認するための試掘調査を実施することとした。今回の調査は、集落の広がりを確認するためにも重要であると考えられた。調査は、調査面積15㎡で平成24年2月3日から7日にかけて実施した。

調査概要

〈基本層序〉

基本層序は、上から①黄灰色砂、②暗灰褐色粘質土、③暗黄灰褐色粘質土、④灰色粘質土、⑤黄灰色粘質土であった。①～③層は宅地造成時の盛土、④層は旧水田床土、⑤層は地山であった。現況の地表面から⑤層までは深さ155cmであった。

〈検出遺構〉

素堀の溝を1条検出したが、旧水田に伴う暗渠であり、下川原遺跡の集落に関連する遺構ではなかった。

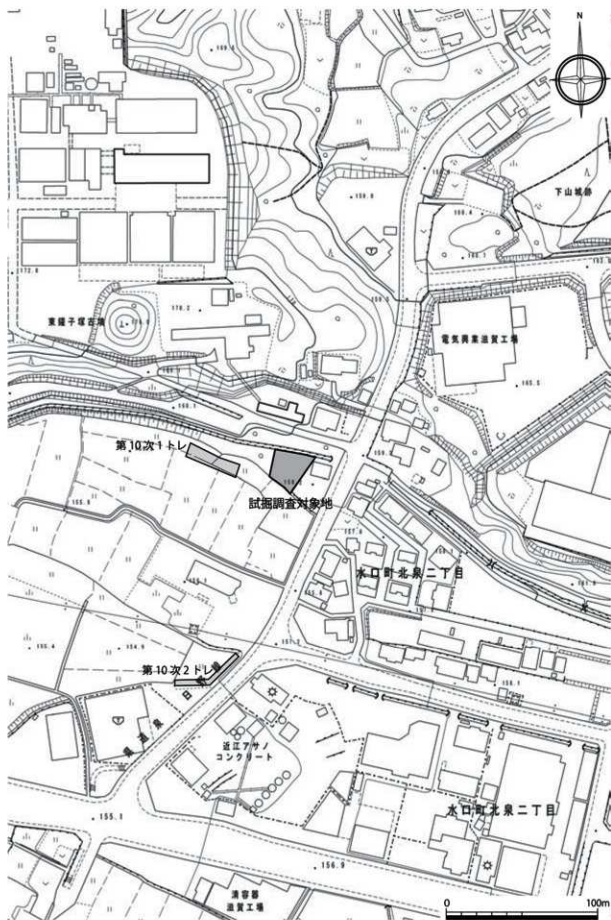


図 27 11-11 次 試掘調査対象地位置図 1:2,500

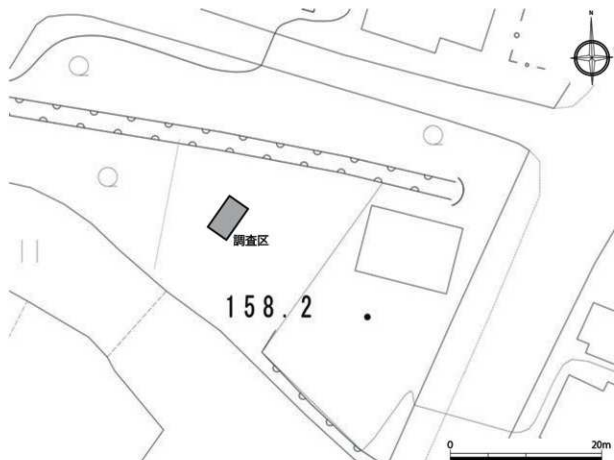


図28 調査区位置図 1:500

〈出土遺物〉

調査区内で遺物を確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査では、下川原遺跡の集落に関係する遺構や遺物を確認することはできなかった。

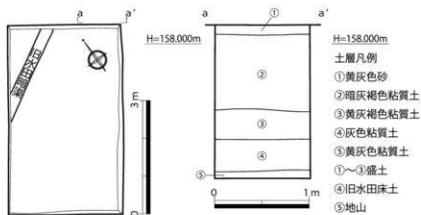


図29 平面図・土層断面図

西側近接地で実施した第10次調査の第1トレンチ東半部は、丘陵先端部を削平して水田を形成したため、遺構の残存状況があまり良くなかった。今回の調査においても造成土の下で水田床土が確認された。第10次調査第1トレンチと同じように水田を作る際に丘陵の先端を削平したものと考えられる。

第10次調査および今回の調査成果から考えて、遺跡北東部の丘陵裾部は丘陵を削平して平坦面を形成しており、下川原遺跡の集落が存在した当時は丘陵部がもう少し南側まで延びていたと推定できる。

遺跡東半部の集落の様相については、中心部分の調査が十分に行われていない。今後、調査が進展し、集落の姿が明らかになるとともに当時の丘陵裾の位置が判明して今回の調査で推定した成果が明らかになることを期待したい。

《参考文献》

国際航業株式会社 2006 『下川原遺跡発掘調査報告書－滋賀県甲賀市水口町所在－』甲賀市文化財調査報告書第7集 甲賀市教育委員会発行

甲賀市教育委員会 2010 『北脇遺跡第12次・下川原遺跡第10次発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第15集

甲賀市教育委員会 2011 『下川原遺跡第11次・竹石遺跡第1次発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第17集

甲賀市教育委員会 2009 『下川原遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第13集

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2012 『下川原遺跡 甲賀市水口町泉』一般国道1号水口道路（2工区）工事に伴う発掘調査報告書



写真 22 調査区全景



写真 23 土層断面

11-15 次 下浦遺跡の調査

調査位置と調査経緯

下浦遺跡は、甲賀市甲南町野田に所在し、柚川に近接する。柚川の中流域にあたり、河川の自然堤防上に立地した遺跡と推定される。平成 17 年に開発に伴う試掘調査で発見された遺跡である。

これまでに数度の発掘調査が行われている。記録保存の発掘調査として実施した第 1 次調査では素堀溝とピットなどが確認されているが、集落を形成する建物遺構は見つかっていない。しかし、灰軸陶器や緑軸陶器、瓦器などが数多く出土し、周辺に集落が存在していたことが推定された。

平成 19 年には第 1 次調査の東約 200m の位置で試掘調査（07-23 次）を実施し、南北方向に流れる自然流路を確認している。この調査では土師器や瓦器が一定量出土し、出土した土器の年代から 11 世紀から 14 世紀にかけての集落が周辺に存在したと推定された。

今回の調査地は、07-23 次から北に 100m ほどの位置である。調査対象地で集合住宅の建設が計画されたため、遺構の有無を確認する試掘調査を実施することとなった。過去の調査地との位置関係から 07-23 次で検出された自然流路の延長部が確認できることが期待された。調査は、調査面積 90 m² で平成 24 年 3 月 15 日から 16 日にかけて実施した。

調査概要

《基本層序》

基本層序は、上から①水田耕作土、②水田床土、③黄褐色ないし青褐色粘質土（第 1・2 トレンチのみ）、④青灰色粘質土（第 3 トレンチのみ）、⑤黄灰色ないし青灰色シルト（第 1 トレンチのみ）、⑥灰色ないし青灰色砂礫、⑦灰色砂（第 1 トレンチのみで確認したが、第 2・3 トレンチは⑤層までしか掘削していない）であった。③層と④層は水田を形成する際の盛土であった。また、⑤層以下は地山と考えられる。現況の地表面から⑤層までが深さ 50cm、⑥層までが深さ 50～105 cm であった。

《検出遺構・出土遺物》

今回の調査では遺構・遺物ともに確認できなかった。

まとめ

今回の調査では 07-23 次で検出された自然流路の延長部分が確認できると期待されたが、調査の結果、遺構と遺物を確認することはできなかった。

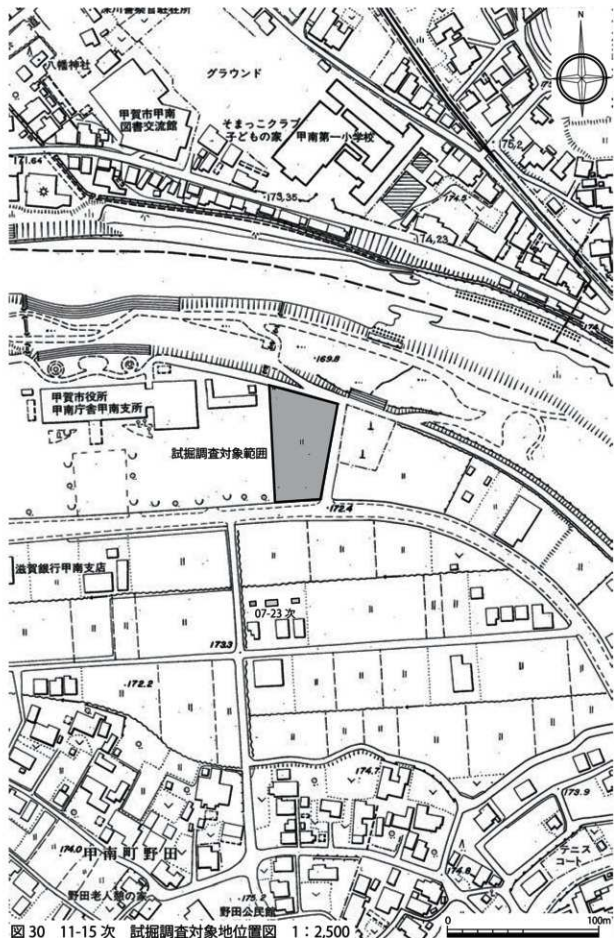


図 30 11-15 次 試掘調査対象地位位置図 1:2,500

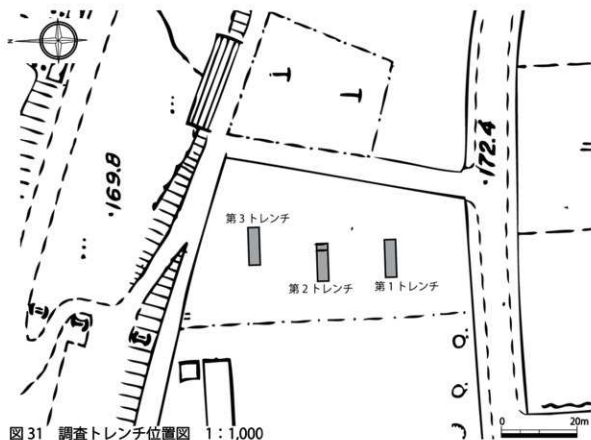


図31 調査トレンチ位置図 1:1,000

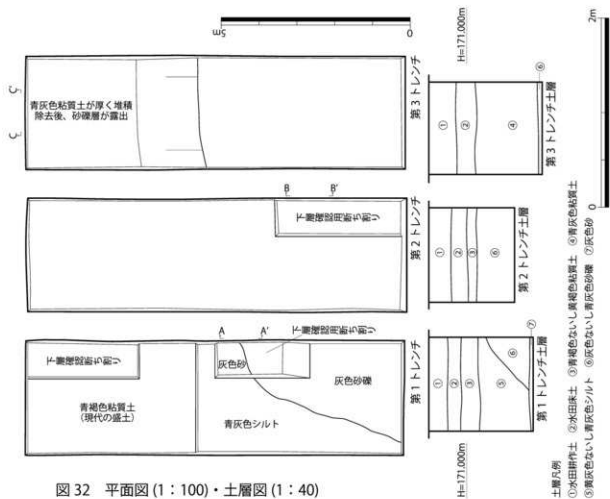


図32 平面図(1:100)・土層図(1:40)

調査で確認した土層の堆積から考えて、調査地は袖川の氾濫によって著しい削平を受け、後世の土地造成によって形成された水田であると推定される。

下浦遺跡については、これまでの調査で集落の様相を明らかにする資料を得られていない。今回の調査においても同様の結果となった。今後の調査において下浦遺跡の集落が姿を現すことを期待したい。

〈参考文献〉

甲賀市教育委員会 2006 「下浦遺跡発掘調査報告書～甲賀市甲南町野田～」 甲賀市文化財調査報告書第4集



写真 24 第 1 トレンチ全景



写真 25 第 2 トレンチ全景



写真 26 第 3 トレンチ全景



写真 27 第 1 トレンチ土層

第2章 史跡紫香楽宮跡(宮町遺跡第40次)発掘調査

調査地は、紫香楽宮跡の中心建物群の北東に位置する。

これまでの調査で、中心建物群の空間には、東西9間(37.1m)×南北4間(11.9m)の正殿と考えられる四面廂建物Ⅰ(SB292001)と棟間距離で北方約27mの位置に東西9間(26.7m)×南北4間(11.9m)の後殿と考えられる四面廂建物Ⅱ(SB29003)が建設されようとしていたが、建物Ⅱは五間門(SB29500)と掘立柱塀(SA292003)に置き換えられている。

このことは、正殿と後殿の建物で構成されるべき区画が、南北に分割されたことを意味すると思われる。建物規模から考えても紫香楽宮中枢部で区画を分割しなければならない大きな計画変更があったことを示唆している。

また、第29次(2001年度)と第30次調査(2002年度)では五間門の約25.5m北方の西寄りに、紫香楽宮の主要殿舎とみられる東西7間(24.5m)×南北5間(14.9m)の南北に廂を持つ建物Ⅲ(SB30006)が確認され、このような規模の大きな建物が、なぜ正殿中軸線上に配置されていないのか疑問となっていた。

今回の調査では、五間門北方の建物配置と性格を確認するため、正殿中心を基準とした北方延長線を挟んだ建物Ⅲの左右対称の位置で500㎡の確認調査を実施した。

調査は平成23年9月26日から開始し、平成24年1月31日に終了した。

また、調査期間中の1月22日に現地説明会を開催し、500名を超える参加者があった。

〈検出遺構〉

建物Ⅳ(SB40103)

一辺1.3～1.5mの柱掘形を28箇所検出し、掘形内には35cm～40cmを測る柱穴を確認した。また、北側第2列の掘形の断面観察から、遺構の残存深度は0.2mほどである。

建物方位はN0°55'Eを測り、東西長は24.86m、柱間寸法は3.5～3.6mのほぼ等間隔で7間分、南北長は14.50m、廂の柱間寸法が3.7m、身舎の柱間寸法が2.4mのほぼ等間隔で3間分を検出した。

建物全体の規模は、桁行7間(〇84尺)×梁行5間(〇49尺)を測る7間二面の東西棟の掘立柱建物跡と考えられ、遺物がほとんど出土しないが、建物規模や方位、全体の配置位置関係から紫香楽宮期の遺構と判断した。

建物Ⅴ(SB40002)

一辺0.4～0.5mの柱掘形を10箇所検出し、掘形内には約15cmの柱穴を確認した。建物方位をN8°04'Wに取り、東西長7.1m×南北長4.7mを測る。

梁行、桁行とも柱間寸法8尺の3間×2間の東西棟と考えられ、遺構の重複関係から建物Ⅳ(SB40103)に後出するが、出土遺物が細片であったため時期は特定できない。

まとめ

建物Ⅳ(SB40103)の特徴

この建物について注目すべき内容が2点ある。

第1に、建物規模が大きく床面積は約360㎡に達する。

紫香楽宮関連遺跡の調査でも、建物Ⅰ(SB292001)の約440㎡、さらに北方に位置する宮北辺の建物(SB13230)の約430㎡(反転復原での推定面積)、北方延長線を挟んだ左右対称に位置する建物Ⅲ(SB30006)の約370㎡に次ぐ4番目の規模となる

他の都城遺跡との比較でも、東西棟で床面積が300㎡を超える事例は、大極殿や内裏の中核建物に限られることから、この建物も紫香楽宮の区画中枢施設と考えられる。

第2に梁行の柱間を5間としている点である。

用材調達を考えれば、12.5尺間隔で4間、または10尺間隔の5間にすべきところを、あえて身舎の柱間を狭くし、広い廂にする構造は、荘厳さを増すための特別な意図を感じさせる。

他の遺跡でも身舎を3間とする建物は、内裏や貴族の邸宅の正殿など格式を重視する建物に限定され、梁行を50尺とする例は大極殿や内裏正殿など宮殿の主要建物に限られる。

東西に並立する2棟の大型建物

後殿の建設計画を中断しても、区画を南北に分割しなければならない理由と新設した門に大極殿閣門や朱雀門に用いられる格式の高い五間門を採用したのは、新設する北側の区画に極めて重要な施設を配置する意図があったことを示している。

建物規模や構造が類似する建物Ⅲ(SB30006)との関連を考えると、建物Ⅳの方は東に約1度、北方延長線を挟んで西側に位置する建物Ⅲは約4度西に振るので、厳密には同方位ではない。また南北方向の位置も五間門(SB29500)と掘立柱塀(SA292003)を基準とすると、建物Ⅲと建物Ⅳでは5.8mも位置がずれる。

その意味では左右対称とは言いつれないが、方位や配置のずれは、東西廡殿(SB291001・SB28193)でも認められることや2棟の建物距離も軒端で約16.5m離れて干渉することなく立地できることから、建物Ⅲと建物Ⅳは対として計画されたと推測できる。

今回のように正殿の北方に2つの建物が並立する建物配置は、他の都城遺跡では、恭仁宮跡(京都府木津川市所在)だけで認められる。

しかし、恭仁宮跡では、大極殿北方に「内裏東地区」(桁行7間の四面廡建物を中央に配置する東西109m×南北139mの築地塀で囲まれた区画)と「内裏西地区」(桁行5間の二面廡建物を中央に配置する東西98m×南北128mの掘立柱塀で囲まれた区画)が確認されている。

東西区画が独立し、2棟の建物規模や構造に相違はあるものの、宮の中心部北方には、恭仁宮の内裏相当区画に類似した施設が配置されていた可能性が高まった。

紫香楽宮の2棟の建物の区画の有無については今後の課題となるが、同時期の恭仁宮だけに見られる類似例として注目すべき遺構である。

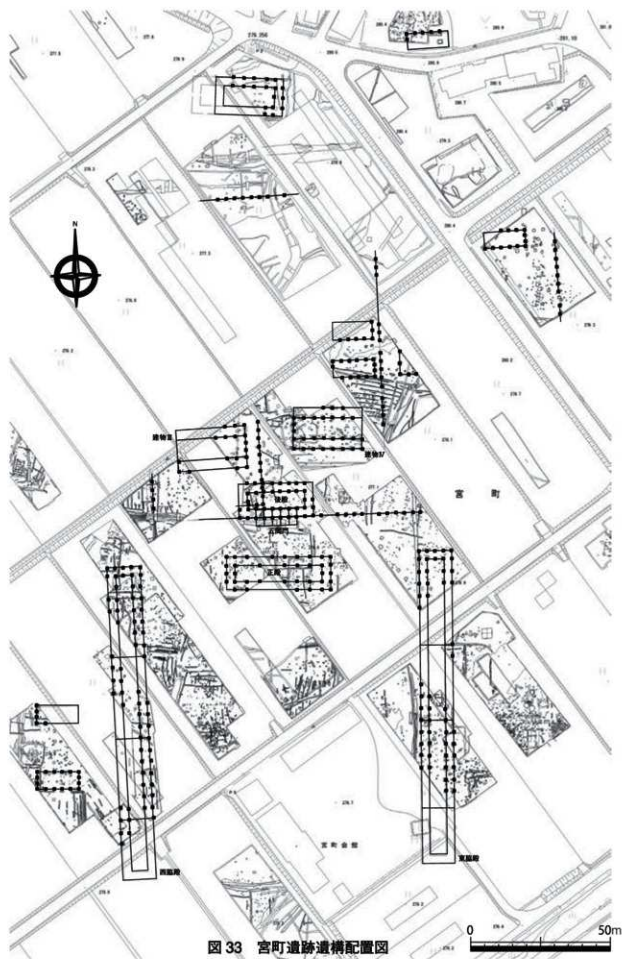


図 33 宮町遺跡遺構配置図



写真 28 建物Ⅳ(SB40103) 遺構全景 南から

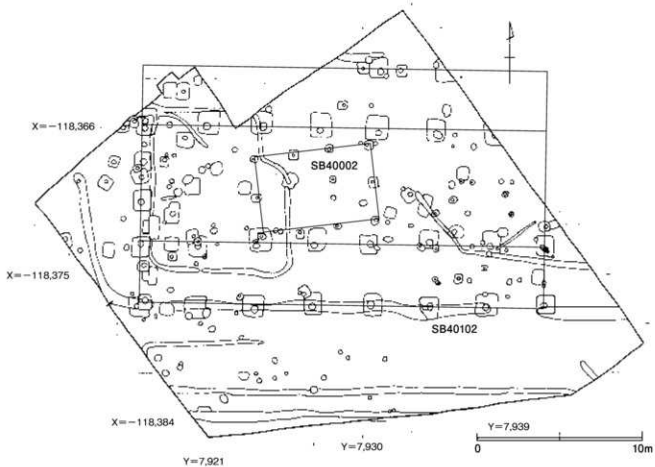


図 34 今回確認した建物Ⅳ 遺構実測図



写真 29 SB40002 全景写真



写真 30 建物Ⅲ (SB2930006) 南から撮影 (第 29 次調査)

報告書抄録

ふりがな	へいせいじにじゅうよねんど しないいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	平成24年度 市内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	甲賀市文化財報告書							
シリーズ番号	第20集							
編者名	小谷徳彦 鈴木良章							
編集機関	甲賀市教育委員会							
所在地	温泉甲賀市甲南町野田810番地							
発行年月日	平成25年(2013年)3月22日							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積(m ²)	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
北黄瀬遺跡	甲賀市信楽町黄瀬	25209	367-150	34° 55' 29.5"	136° 4' 25.4"	9.0	2011.4.13	変電所機器
北黄瀬遺跡	甲賀市信楽町黄瀬	25209	367-150	34° 55' 28.3"	136° 4' 25.9"	14.0	2012.3.22~ 2012.3.27	鉄塔
竹石遺跡	甲賀市水口町三大寺	25209	363-127	34° 56' 57.2"	136° 8' 43"	135.0	2011.5.13~ 2011.5.19	駐車場
宮町遺跡	甲賀市信楽町宮町	25209	367-033	34° 56' 14.4"	136° 5' 9.5"	20.0	2011.7.12~ 2011.7.14	個人住宅
水口城遺跡	甲賀市水口町中部	25209	363-113	34° 58' 17.9"	136° 9' 46.4"	15.0	2011.9.13	分譲住宅
水口城遺跡	甲賀市水口町城内	25209	363-113	34° 58' 23.6"	136° 9' 49.6"	9.0	2011.12.1	個人住宅
古屋敷船遺跡	甲賀市甲南町市原	25209	366-054	34° 56' 9.5"	136° 9' 13.8"	7.5	2011.11.15~ 2011.11.18	暗渠管理施設
貴生川遺跡	甲賀市水口町貴生川	25209	363-091	34° 57' 25.7"	136° 8' 55.1"	205.0	2011.12.5~ 2011.12.12	土地区画整理
下川原遺跡	甲賀市水口町泉	25209	363-116	34° 59' 11.6"	136° 8' 12.2"	15.0	2012.2.3~ 2012.2.7	個人住宅
史跡紫雲堂宮跡	甲賀市信楽町宮町	25209	367-033	34° 56' 9.8"	136° 5' 1.7"	500.0	2011.9.26~ 2012.1.31	遺構内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
北黄瀬遺跡	官衙	近世				土師器		
竹石遺跡	集落	古墳・中世		竪穴住居、掘立柱塚		須恵器、土師器、瓦器		
宮町遺跡	都城	近世				土師器、陶器		
水口城遺跡	城館	近世		土坑		土師器、陶器		
貴生川遺跡	集落	中世		ピット、溝、土坑		瓦器、土師皿		
下川原遺跡	集落	古墳・古代						
史跡紫雲堂宮跡	都城	古代		掘立柱建物		土師器、須恵器		

甲賀市文化財報告書第 20 集
平成 24 年度 市内遺跡発掘調査報告書

印刷・発行 2013 年 3 月 22 日
編集・発行 甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
TEL 0748-86-8026
FAX 0748-86-8216
印 刷 村田印刷株式会社

